

志水 私は個人的にもサッカーが大好きで、今回関大や阪大の大学生にKISの学生たちも参加するなかで、非常に楽しくボールをけり、気持ち良

い汗をかけてよかったです。

志水 私は個人的にもサッカーが大好きで、今回関大や阪大の大学生にKISの学生たちも参加するなかで、非常に楽しくボールをけり、気持ち良

い汗をかけてよかったです。

黒田 今年の「24時間サッカー」が、関西大学サッカー部をはじめ多方面の方々の協力を得て、成功裡に開催されましたことに心から感謝しています。KISは茨木市・豊川の地域にある種「よそ者」として入ってきてから、6年目を迎えました。地域と一緒に歩む学校づくりを重要な学校運営の柱として掲げて、この間地域のフットサル大会やフェスティバルなどにも積極的に参加してきました。

今回のイベントは、こうした取り組みの成果をより深める機会になりました。また関大や阪大の学生たちにもたくさん参加・協力していただき、取り組みの幅も飛躍的に広がりました。

近い将来、地域の子どもたちを対象にした特色あるサッカースクールを開設していくことを考えていましたが、その布石になりました。今後、地域に根ざした学校づくりの内容を一層深めていくことが必要だと感じました。

志水 私は個人的にもサッカーが大好きで、今回関大や阪大の大学生にKISの学生たちも参加するなかで、非常に楽しくボールをけり、気持ち良

い汗をかけてよかったです。

今年で阪大に勤めて11年目、この

豊川地区に馴染み8年目になりました。もともと同和問題の文脈でこの地域の教育コミュニティづくりのサポートをさせていただいてきた経緯があります。大阪では十数年前から中学校区の教育コミュニティづくりが施策化されました。この

豊川地区は、近年KISや大阪茨木モスクなどもでき、大阪府内でも国際化という面では特色ある地域です。学校と地域が一緒になって子どもたちを育てているという意味で、ここはその代表例でもあると思います。面白い芽が育ちつつある地域です。面白い芽が育ちつつある地域で、今後も学生たちとともに、いろいろと経験させていただきたい

と思っています。

黒田 スポーツの中でも、サッカーに関わる人はいろんな異文化や異なる社会に出ていきたいと思っている人が相対的に多いように思います。

そんな空気がサッカーに関わる人にはあるのでしょうか。

しかし、残念なことだけれど大学・

高校サッカーの関係者にはどちらか

と言えば内向きな人が多い。サッ

カー以外のことを取り組む時間的な余裕がないという意味も含めて。そ

うした中、関大サッカー部には、社

会と関わりたい、サッカーを通して何かをしたい、という伝統がありま

す。特に、今の島岡健太監督はそ

ういう意味では、サッカーを通じてこ

うしたイベントに関わって私も含め

てすごくよかったです。もっと発展さ

せたいと思いました。

このイベントに参加した学生たち

が、サッカーを通して新しい社会を

知り、満足感や好奇心が高まってい

るのが良く分かります。サッカーし

か知らないけれど、サッカーを

ができるなどを改めて知った面白さ

ですね。いいチャンスになったと思

います。

黒田 今回のイベントでも「反差別・反人

種主義」の内容を盛り込んだ宣言文を

開会式で読み上げました。サッカーの

ワールドカップでも、こうした内容を

宣言する、と聞きましたが、その背景

を教えてください。

黒田 サッカーには、さまざまな人

種問題、宗教問題、国家の問題がぶ

つかりあってきました歴史的経緯があ

ります。ある種サッカーは、闘争の

場、激しい葛藤の場でもあったので

す。宗教性や階級性をサッカーで表

越境人 特集2 鼎談

学生が育つ環境とは 教育とサッカーから考える

ここでは、特集1「24時間サッカー＆チャリティーオークション」を振り返りながら、そこに通底する「子どもが、そこにいれば勝手に育つ場、環境を作ることが教育」（哲学者・鷺田清一／広報誌「越境人」vol.6参照）という問題意識を教育活動やサッカーを切り口に深めていきます。

鼎談では、同イベントを主催した関西大学サッカー部と準備段階から実行委員会に大学院生が参加するなど積極的に協力していただいた大阪大学から、それぞれ黒田勇先生と志水宏吉先生に参加していただき、厳敵俊・KIS校長を交えての興味深い論議が行われました。

実施日：2013年8月7日
進行：宋悟・KIS事務局長



黒田勇さん
関西大学副学長
(社会学部教授)
関西大学
サッカー部部長



志水宏吉さん
大阪大学大学院
人間科学研究科教授
大阪大学未来戦略機構
第五部門(未来共生
イノベーター博士課程
プログラム)部門長



厳敵俊さん
コリア国際学園
(KIS)
中等部・高等部
校長





であったからこそ、現実の闘いがそこに反映された。そこに濃縮され出てくる。逆にそれがおかしいという議論もしやすくなる。それを克服しないとスポーツは広がらない。

面白い例を挙げると、世界屈指のイタリアのサッカークラブ「ACミラン」は、イタリア在住の英国人が創設して、当初イタリア人を排除していました。それに対抗する形で、サッカーはインターナショナルであり、世界中の選手に門戸を開放するという意味を込めて「インテル」が創設されました。

志水 サッカーはスポーツの中で一番庶民的で、底辺が広いと思います。どの国でもどの階層でも取り組みやすい。その結果、階級対立や人種対立、蹴ったり蹴られたりとか（笑）が、顕在化しやすい。かつて中米の国どうしのサッカーの勝敗をきつかけに戦争になつたり、ヨーロッパではフーリガンもナショナリズムと結びついでいたり、旧植民地からきた黒人の選手に差別的な言葉をなげつけて罵倒するなど、深刻な対立や葛藤が頻繁にあり、何とかしなければということもあった。

黒田 サッカーが普遍的なスポーツ

英國のスコットランドのグラスゴーを本拠地とする「セルティック」は、アイルランドからの移民の貧しい人々のチームです。自分たちのオーリジン（原点）とアイデンティティを提供するチームとして育つていきました。「セルティック」の試合には、アイルランドから2週間に1度、熱狂的なサポーターが押し寄せます。グラスゴーは、他のビジネスはボロボロですが、サッカービジネスはうまくいくっている。

大阪にも「ガンバ」も「セレッソ」もありますから、例えば「セレッソ」は「在日」のチームに、「ガンバ」を日本のチームにすればどうか（笑）。

いまは難しくとも長い目で見れば、北朝鮮のピョンヤンや韓国のソウルから2週間に1度サポーターがきて「セレッソ」を応援すれば、大阪は経済的にもすごく潤うよ（笑）。そうした民族の歴史、アイデンティティをサッカービジネスに取り込めば面白い。

「学生を指導する」のではなくて、「学生が育つ場づくり」が重要である、という指摘について、どうお考えですか。

志水 学力問題の研究をここ十何年間やってきて思うことは、世界標準の学力をつけるためには学校の授業を変えなくてはならない、と。一番分かりやすい表現で言えば、教育は「Teaching」ではなく、「Learning」が重要だということです。子どもたちが教室で何を学んでいるかが肝心で、どう教えるかだけをやっていてもダメだ、という議論です。

教育社会学の領域で、昔から「隠れたカリキュラム」は本当にそのと寮生活の中から自分が学んだことが大きかった。その経験もあり、「隠れたカリキュラム」は本当にそのと寮生活の中から自分が学んだことが大きかったです。

以前に文科省のプロジェクトで人权教育の指導に関する文章をまとめたときがありました。現在、この文

章を青写真に全国の公立学校で人权教育が行なわれているはずです。そ

うだなと思います。環境を創ることが決定的で、何を教えるかは二の次

が重要だということです。子どもたちが教室で何を学んでいるかが肝心で、どう教えるかだけをやっていてもダメだ、という議論です。

大阪にも「ガンバ」も「セレッソ」もありますから、例えば「セレッソ」は「在日」のチームに、「ガンバ」を

日本のチームにすればどうか（笑）。

教育は「Teaching」ではなく、「Learning」が重要だ。（志水）

ではなく、一人ひとりの人間が大事にされている場づくり、環境づくりが決定的であり、目には見えないけれど感じられる学校やクラスの雰囲気をどう醸し出していけるのかが大事であるということを提示しました。

厳 学校教育を変えるためには「Teaching」ではなくて「Learning」である、との志水先生の指摘は、本当にその通りだと思いません。そのためには、「Teaching」ではなくて「Learning」に主眼を置いていた高校教育をすれば、大学に進学できるという大胆な入試改革が必要です。そのためには、「Teaching」ではなくて「Learning」に主眼を置いたりにやつてあると思います。もちろん大学もAO入試など様々な工夫をしてきていましたが。

いま、文科省が国際化に対応していくために旗を振り、IB（国際バカロア）のカリキュラムの一部を日本語で受講できるようになります。IB教育は「Learning」に重点を置いた教育内容ですね。いま、文科省は2018年までに200校のIB校をつくることを目標にしています。最近、そのための連絡協議会

ができ全国で35校が加盟しています

が、KISも加盟しました。

教員が一方的に知識を詰め込む教え方を変えたいと思います。それは生徒たちにとつて「苦」でしかないですね。IBはそれを克服していくための一つの手段であると思いま

す。日本のほとんどの大学が、IBを履修した生徒に入学を認めていくという方向に変われば、高校の授業は変わります。高校の授業が変われば、中学校的授業も変わります。

そのための一つの手段であると思いま

す。日本のはほとんどの大学が、IBを履修した生徒に入学を認めていく

といふ方向に変われば、高校の授業は変わります。高校の授業が変われば、中学校的授業も変わります。

— 今の日本社会は、自発性やコミュニケーション力が求められる一方で、組織規律や協調性が過度に求められるダブルスタンダードな社会であるとの批判もありますが。

志水 私の考え方では基礎学力は絶対に必要です。中途半端に「Learning」をして、基礎学力がないから社会に出てから排除されてしまう。学校では、よく基礎学力をA学力と言い、「Learning」の方をB学力と言わますが、Aも完璧で、Bも「そこそこ」ならどんな職場からも排除されないと思います。

厳 基礎学力がなくて、B学力だけというのは話にならない。教育の根本を守らなければならぬ。もう一つは企业文化と衝突します。例え

ば、大学の時にディベートなどで学んだことをそのままやれば、実社会では「この人は組織が分からぬ。KY（空気が読めない）だ」と評価されてしまします。これは学校と企業の文化の違いです。



習指導要領をもとに教科書でどう教えるかを中心に行ってきました。しかし、社会学的に言えば、子どもが学校で何を学んでいるかというと、学んでいることが実は大きいだろう、と。それらを総称して「隠れたカリキュラム」と言います。

僕は高校時代に全寮制の学校に通っていました。自分の形成にとつて寮生活は決定的な意味を持ちました。同じ釜の飯を食べる中で、お

のすと寮生活の中から自分が学んだことが大きかった。その経験もあり、「隠れたカリキュラム」は本当にそのと寮生活の中から自分が学んだことが大きかったです。

うだなと思います。環境を創ることが決定的で、何を教えるかは二の次

が重要だということです。子どもたちが教室で何を学んでいるかが肝心で、どう教えるかだけをやっていてもダメだ、という議論です。

教育社会学の領域で、昔から「隠れたカリキュラム」という概念があります。教育学はすべて表にある、書きかれたものであります。日本の場合なら学

校で行なわれているはずです。そ

のときがありました。現在、この文

章を青写真に全国の公立学校で人権教育が行なわれているはずです。そ

うだなと思います。環境を創ること

が決定的で、何を教えるかは二の次

が重要だということです。子どもたちが教室で何を学んでいるかが肝心で、どう教えるかだけをやっていてもダメだ、という議論です。

「Learning」に主眼を置いた

大胆な大学の入試改革が必要だ。（厳）

を育てるのが人権教育だと設定しました。

第2番目に、そのためには次の3つの側面が必要だと言及しました。一つは知識的理解。世界人権宣言の内容や部落差別の歴史などを授業で教えることですね。いわば「頭」の側面です。2つ目は、価値的態度的内容です。「心」の問題です。心を鍛えないとダメだ、と。日本の学校は、「頭」はそれなりにやつてているかもしれないけれど、「心」と「身体」の側面は改善されない、いわば「身体」の側面を正直に主張できるか、初めて出会つた人とコミュニケーションを開いていけるかななど、いわば「身体」の側面です。

要するに、他人も自分も大事で生きる人間になるためには、「頭」も、「心」も、「身体」も鍛えないとダメだ、と。日本の学校は、「頭」はそれなりにやつてているかもしれないけれど、「心」と「身体」の側面は改善されない、いわば「身体」の側面を正直に主張できるか、初めて出会つた人とコミュニケーションを開いていけるかななど、いわば「身体」の側面です。

大胆な大学の入試改革が必要だ。（厳）

黒田 いま就職の実態が見えなくなっているところがあります。私は拮抗しているような気がします。

つまり、かつての従来型の人材が本当は欲しいと考える企業とそうでない企業と。

志水 いま教育界ではPISA型学力が世界標準になつております。日本の学習指導要領もその方向になつています。いろいろな道具を使いこなせること、自分で考え判断して、自分でアクションが起こること、多様な人間の集まりの中でチームワークを持ちながら自分の役割を果たせる

ます。いろいろな道具を使いこなせること、自分で考え判断して、自分でアクションが起こること、多様な人間の集まりの中でチームワークを持ちながら自分の役割を果たせる

ます。いろいろな道具を使いこなせること、自分で考え判断して、自分でアクションが起こること、多様な人間の集まりの中でチームワークを持ちながら自分の役割を果たせる



意欲をどのように育むのかは、どのように習慣を育むのかといふことに尽きる。(志水)

こと、この3点セットをPISA型学力のモデルとしていますが、私はこれまでの学力観と比べて、良いと

思います。A学力も大事であり、B学力も大事だということです。

これは私の疑問でもあるのですが、日本や韓国などではまずA型学力をつけないとB型学力は無理という考え方が支配的です。PISA型学力が世界的に評価されているフィンランドの小学校の授業を見ると、A型学力は考えていません。とにかく考えさせ、とにかく話をさせます。自分でやればおのずと基礎学力もつくという考え方です。実際そうです。

嚴 私などはそうした考え方だけでは、不安になります(一同笑)。

志水 それはフィンランドの歴史や文化、風土など社会全体をひっくり返して判断することが重要です。例えば、フィンランドでは小学校の時から「君どう考える?」と問い合わせ徹底して議論させている。日本でフィンランドの授業をやつても絶対にファイットしないと思います。かと

いつて日本型の暗記型・詰込み型で結論的に言えば、日本ではA学力がないとB学力は成り立たないと思います。授業やカリキュラムのなかで基礎をみつかりやるところもあるし、応用もある。サッカーで言いかえるとバスやヘディングの練習も毎日しつかりやりながら、毎日ゲームもする。基礎練習とゲームの両方をうまく組み合わせることだと思います。みつかりやるところと自由闊達に議論したり、作品を作ったり、その両方が相互補完的に機能することが必要です。

黒田 それが理想的ですね。私のゼミでは、グループ分けしてテーマからすべて自分たちで決めさせて、とりあえず3週間でまとめさせます。それにコメントしてまた学生自らに任せます。それはうまくいっていませんが、この1、2年はベースになる

先日宇都宮市に行きました。宇都宮デューのハビトウスという考え方でもあるのですが、意欲をどのように育むのかは、どのように習慣を育むのかは、どのように尽きると思います。子どもの意欲にだけ働きかけるから

が、どのようにならぬかと、そのことを食べないと無性に食べたくない

う。「習慣が意欲を生む」と考えます。

志水 フランスの社会学者ブルデューのハビトウスという考え方でもあるのですが、意欲をどのように育むのかは、どのように尽きると思います。子どもの意欲にだけ働きかけるから

が、どのようにならぬかと、そのことを食べないと無性に食べたくない

う。「習慣が意欲を生む」と考えます。

黒田 私はよく食欲で例えるのですが、先日宇都宮市に行きました。宇都宮と言えば餃子ですよね。地元の人に

とっては、小さい時から食べてきました。それはうまくいっています。それを食べないと無性に食べたくない

う。「習慣が意欲を生む」と考えます。

志水 フランスの社会学者ブルデューのハビトウスという考え方でもあるのですが、意欲をどのように育むのかは、どのように尽きると思います。子どもの意欲にだけ働きかけるから

が、どのようにならぬかと、そのことを食べないと無性に食べたくない

う。「習慣が意欲を生む」と考えます。

黒田 お話を聞きながら、母の話を思い出しました。最近私が学生によく話を提供していく、あるいは自分から提起していく学校や生徒になつていくことが大切であると思っています。

志水 「越境人」の意味について身をもつてわかるようなプログラムやプロジェクトを提供していく、あるいは自分から提起していく学校や生徒になつていくことが大切であると思っています。

黒田 お話を聞きながら、母の話を思い出しました。最近私が学生によく話を提供していく、あるいは自分が大学に入つたのだから、しっかりと教養を身につけなさい」と言いました。その時は適当な返事をしましたが、あとになつてそのことの意味を聞いたときに、「教養とは、人の立場になつてものをを考えることができるのこと」と母は応えました。すでに母は亡くなっていますが、最近考へると「その通りだ」と改めて思い返します。

大学とは確かに「人の立場になつて物事を考える教養を身につけるところ」だと思います。他人や異なった価値観を理解すること、別の方針から物事を見る視点を持つこ

いま、高校教育に決定的に欠けているのは、「Why」の部分ではないか。

「なぜ、勉強するのか」ということだ。(嚴)

「なぜ、勉強するのか」ということだ。

(厳)

「なぜ、勉強するのか」ということだ。

(嚴)

とです。「なぜ、勉強するのか」という「Why」については、このあたりに視点を置いてもいいのではないかと思います。

(編集責任:広報誌「越境人」編集委員会)

黒田 「越境人」の意味について身をもつてわかるようなプログラムやプロジェクトを提供していく、あるいは自分から提起していく学校や生徒になつていくことが大切であると思っています。

志水 KISを外から見ていると、まだ十分には身についていない。

黒田 「頭」で理解できただとしても、まだ十分には身についていない。

志水 越境人の育成という理念は明確のよ

黒田 「頭」で理解できただとしても、まだ十分には身についていない。

志水 先ほど話に出ましたIBのカリキュラムの中にはCAS(Creativity/Activity/Service)というものが

あります。Cは創造性、Aは活動、Sは奉仕です。学校外の広い社会で経験を積み、多様な人々と共に共同作業することで協調性や思いやり、実践の大切さを学ぶ学習です。IBカリキュラムの中では、きちんと単位と評価されます。

黒田 いま、高校教育に決定的にかけているのは、「Why」の部分ではないでしょうか。「なぜ、勉強するのか」ということです。そういうことです。そうでないと、単に有名大学に進学するための一効果

「教養とは、人の立場になつて物事を考える」とがができる力の「J」と

」。(黒田)

知識がなくてそれすらできなくなつてきている場面に出くわします。

イタリアでの在外研究時の授業で、向こうの学生は私がたつた最初の5分間話しただけで、皆手を挙げて質問を始めました(一同爆笑)。聞く間に慣れているそうです。

黒田 フランスの社会学者ブルデューのハビトウスという考え方でもあるのですが、意欲をどのように育むのかは、どのように尽きると思います。子どもの意欲にだけ働きかけるから

が、どのようにならぬかと、そのことを食べないと無性に食べたくない

う。「習慣が意欲を生む」と考えます。

志水 フランスの社会学者ブルデューのハビトウスという考え方でもあるのですが、意欲をどのように育むのかは、どのように尽きると思います。子どもの意欲にだけ働きかけるから

が、どのようにならぬかと、そのことを食べないと無性に食べたくない

う。「習慣が意欲を生む」と考えます。

黒田 お話を聞きながら、母の話を思い出しました。最近私が学生によく話を提供していく、あるいは自分が大学に入つたのだから、しっかりと教養を身につけなさい」と言いました。その時は適当な返事をしましたが、あとになつてそのことの意味を

聞いたときに、「教養とは、人の立場になつてものをを考えることができるのこと」と母は応えました。すでに母は亡くなっていますが、最近考へると「その通りだ」と改めて思い返します。

大学とは確かに「人の立場になつて物事を考える教養を身につけるところ」だと思います。他人や異なる

価値観を理解すること、別の方針から物事を見る視点を持つこ



KISの教養科「平和学ワークショップ」授業

ことですよ」と続き、4～5人のグループに分かれ、conflict を定義することにしました。

「文化のくい違い」「意見のくい違い」「感情のくい違い」。中には「成長のきつかけで、人間関係では不可欠なもの」というのもありました。その後はDVDを見ました。ペンギンとアザラシが魚をめぐってconflictしていました。ペンギンが捕つたはずの魚をアザラシが横取りしたのが原因です。悪いのはアザラシですが、アザラシにも事情はあって、子どもたちが何日も食べていいなどということでした。二人



前期の設置科目は、「平和学ワークシヨツプ」「映画」「国際関係セミナー」の4つ。どれもより実践的で、問題解決型の授業を目指します。

5月7日の「平和学ワークシヨツプ」の授業。奥本京子先生（大阪女学院大学教授）が黒板に
conflictと書きました。

17名の受講生のうち、中等部1年生が11名。辞書から単語を引くと、次々に手が上がります。「紛争！」「葛藤！」「対立！」「じゃ、それをどう説明すればいいでしょう。それって、どんな状態でしょう。原因は？」「考えるってことは

は、今後は協力して魚を捕ろうといふことで一応の解決を見たようですが、またグループに分かれ、何を感じたかを話し合います。魚の取り合いに、どちらにより正当性があるのか。「独島＝竹島問題もこんなものかな」「そうかもね」。生徒たちは自分の経験や国際問題も交えて意見をシェアしていました。最後に、奥本先生。「魚の視点は見てくれましたか」。「エサとしてしか扱われなかつたのですが、それでいいでしようか」。「あ、そうや。気付きませんでした」。こうしてだんだんと、自己表現と傾聴、平和的対話の大切さを学んでいきます。

第1期卒業生、南アのボツワナ共和国での体験記を母校で報告

ツワナでの活動内容の紹介や、その構造的な社会問題、帰国後のフォロー活動などについてテンポ良い、洗練されたものでした。

単にめずらしい所へ行つた、そこでの「武勇伝」に終始せず、「何のために行き、いつたいそこで何をし得たか」ということが、ときには内省的に、ときに未来志向の視点も織り交ぜ、語りに語り、後輩たちからの様々な質問にも受け答えしました。

現在は、ボツワナの現地の小学校



第1期卒業生で現在立命館アジア太平洋大学（APU）3年生の宋宇蘭さんが、5月11日（土）の放課後に、文科省が推進する大学のインバーンシッププログラムの一環でアメリカにあるボツワナ共和国を訪問した体験記についてプレゼン報告をしました。今年2月の約1ヶ月間にわたり、日本の文化や言葉をボツワナ現地の小学校で教えるというプロ

一四〇〇名とAPUの学生一四〇〇名を手紙などで一人ひとりつなぐ「ブルースカイプロジェクト」に取り組んでおり、KIS生徒への参加も呼びかけられました。KISでは卒業生が母校を訪れて、後輩たちの在校生と交流したりする機会は当たり前のようになります。これもまた、「KISらしさ」のひとつかも知れません。

2013年度第6回入学式を挙行

金教頭とジェレミー先生による3ヶ国語の司会進行で始まつた式典は、金時鐘学園長の開会あいさつに続き、来賓を代表して大阪府議会議員の森みどり先生から心温まる祝辞をいただきました。また今年は大阪府知事、茨木市長、駐大阪大韓民国総領事などからの祝賀のメッセージをいただきました。中等部1年の木村真白さんと高等部1年の金鉉鉉君が、越境人となるよう最善を尽くすとの宣誓を行いました。

嚴校長は挨拶の中で、新入生たちに「自分のことは自分でしつかりとやり遂げる、他人を尊重してよく交わる、自國中心的な考えではなく世界平和を願うことができれば、実り多い幸せな学校生活になるだろう」と語りかけました。

その後、KISの第1期卒業生で韓国・延世大学経済学部に在籍する今庄貴博君が、後輩たちに対しても激励の挨拶を行い、続いて在校生を代表して高等部3年生の朴苑真さんからもコリア語と英語を時おり交えな



新入生歓迎合宿を開催（滋賀県琵琶湖）

第6期学生会役員立候補者のアピールは演説だけでなく、学生からの質問コーナー、嚴校長先生とのディスカッションなど多様な形で実施されました。KISではチャレンジすることがかつこいい！堂々たる演説、学生たちの質問も後を絶ちません。まだまだ未熟ですが精一杯自分を表現しようとする姿はとても誇らしい風景でした。そして第6期学生会役員に5名が選出されました。



2013年度コリア国際学園第6回入学式が、4月6日(土)に豊川いのち・愛・ゆめセンターで行われ、

がら挨拶がなされました。新入生たちは期待と不安を胸に新しい学園生活をスタートさせました。

全校生徒が参加する中、新入生歓迎会が4月19日（土）～20日（日）にかけて「琵琶湖青少年の家」で実施されます。

ことなくみんなで楽しんだ運動会。
KISのさらなる発展を予感させる
合宿でした。